

繊維 広がる水平連携 —十数社 垣根越え協力、生産—

「チームで産地守る」

■新たな市場に挑戦

水平連携の取組みを進めているのは稲山織物（大野市）、カツクラ、原田商事、広部撚糸、藤井（以上福井市）、松文産業（勝山市）など撚糸、整経、機業の十数社だ。

3年前、松文産業に大手アパレルメーカー向けの衣料の大型発注があったのがきっかけで始まった。このときの発注量は、同社の生産能力の半分以上を占めるほどで、ほかの仕事を抱えながらでは対応できないと判断し、数社に話を持ち掛けた。

今までは自社の許容量を超える発注は断るしかなく、結果的に県外や海外の企業に仕事を奪われてしまうケースも少なくなかった。松文産業の平井郁男・勝山工場営業部長は「大きな発注に対応できるよう設備投資するのも簡単ではない。1社では20の生産能力しかなくても、5社集まれば100になり、新しい市場にチャレンジできる」と連携の狙いを説明する。

■思いは各社共通

関係性の強い企業同士で生産を委託する動きはこれまでもあったが、複数の同業者が協力し合うことはほとんどなかった。「(松文産業から)提案を受けたときは驚いた。同じ産地の企業とはいえライバルであり、昔なら考えられないことだ」と、ある企業の担当者は話す。

各社が結束する背景には、事業所が減り続ける繊維産地の存続に対する危機感もある。県の統計によると、従業員4人以上の事業所数は2005年時点で872だったが、16年には549に減った。このまま廃業が止まらなければ、産地の分業体制が崩壊しかねないという懸念がある。広部撚糸の広部清志専務は「各社がまとまっていかなければならないという思いは共通していた。ただ、そのきっかけがなかった」という。

■リーダーあえて決めず

水平連携のメリットは、大きな仕事を受注した企業は生産を調整でき、ほかの企業にとっては機械があまり稼働していない時期にも仕事を得られる点だ。また、連携する他社に織布などを依頼する場合、生地に関する情報も提供することから、参画する企業にとっては、苦手としていた分野の技術向上にもつながるといえる。各社の得意分野は婦人、スポーツ、インテリアなどさまざま、それぞれの強みを生かして幅広く仕事を受けることができる。

リーダー的な役割を担う企業を決めていないのも特徴の1つ。大型の発注を受けた企業が、その都度中心的な役割を担っていくという。参画する企業の担当者は「大型の発注をチームで獲得していきたい。1社だけで成長をしていくことが難しくなっているのが産地の現状。力を合わせて、県外や海外の大きな企業に負けない競争力をつけていく」と意気込んでいる。